

妻の目を盗んで

義父と深夜の温泉でしげこむ

訳あり理系筋肉の秘め事



深夜二時にふらふらしながら部屋をでて温泉へ。

桶に組んだお湯をかけて、一息ついたなら体を洗おうとタオルを泡立てる。

まず腕を洗おうとし、自分の体に赤い跡とひっかき傷が散らばっているのを見てため息。

それを聞き咎めたように「圭一くん、お疲れのようだね」と背後から声が。

ふりむくと妻の父親、俺にとっては義父が微笑して、やおら隣へと腰

を下ろした。

ついさっきまで妻を抱いていたものだから「お疲れのようだね」の言葉に含みがあるように思えて恥ずかしいやら居たたまれないやら。

「い、いえ・・・なんだか眠れなくて」ときこちなく笑って誤魔化せば「ああ、わたしもだよ」と読めない表情のままシヤワーを。

鏡に向いていたのが、ちらりと見てきたのにぎくりとするも「きみはほんとは見惚れるような筋肉質な体つきをしているなあ」と思いがけない誉め言葉。

「わたしもジムに通って励んでいるのだけどね、なかなか理想の筋肉がつかないのだよ。

やっぱ圭くんは若い分、肌には張りがあって瑞々しいし、筋肉は厚みと弾力があるし、全体的に筋骨隆々としたブロンズ像のようで絵に

なつて羨ましいな」

視線が舐めるように肌を滑り「お義父さんこそ、見惚れるような体をしてゐるのに・・・」と漏れそうになつた熱い吐息を飲む。

長身で引きしまった体はスタイル抜群、大企業の社長ながら、だれに対しても物腰柔らかく、男にも紳士的に心を砕くから、そりやあ恋心を寄せる人は数知れず。

奥さんを病気で亡くしたあと、なかなか再婚しないのもポイントが高いらしく、多くの老いも若きものの女性が獲物を狙う肉食獣のように目をぎらつかせて狙つてゐるとの噂。

男から見ても魅惑的な人であり、頬を熱くしながら「お義父さんにそういうられると、うれしいですが・・・」と視線をそらす。

「俺、大学生のころはカヌーをしていて今も趣味で・・・というのは前に話しましたよね。

もちろん漕ぐのに筋肉が必要ですが、つけすぎると重くなってカヌーが沈んじゃうんです。

だから、ほどよく鍛えようとするわけで、ジムのトレーナーに相談して計画的に慎重にトレーニングをして、なのに、どうしても必要以上に肉つきがよくなってしまう。

カヌークラブのリーダーには筋肉デブ！ってよく怒られています」

「筋肉デブ、ねえ」と笑いつつ、向ける視線はねっとり。

落ちつかなくてカヌーの話をつづけようとしたら「リーダーに叱られても娘はよろこんでいるのでは？」と柔らかな口調ながら皮肉っぽく。

「娘はとんだじゃじゃ馬で、人並みの雄馬相手では、とてもとても満足しないだろう。」

きみほどぶ厚く固い筋肉をまとい、カヌーじごみの筋力を持つ男なら、娘を極楽へと誘ってくれているんじゃないか？」

「そ、そんな・・・」とうつぶいて、ひたすら太ももをタオルで擦りつつ、腰あたりに舐めるような視線を這わされて、むず痒くてたまらない。

太ももを震わせて、でも、できるだけそ知らぬふりをして「そういえば」と話をそらす。

そのあとも妻との夜の事情を揶揄されながら世間話を交わせ、胸をそわそわするも、義父の低く掠れた声が耳に心地よくて眠気が。

そのうちうつらうつらしだして「圭くん？」と呼ばれて、上体を跳ね起こした。

「す、すみません・・・！」と向きなおれば「心配しただけだ。謝ることではないよ」と仏のようなほほ笑み。

なれど「じやじや馬の娘を乗りこなすのは大変、疲れるだろうからね」と俺の心をかき乱すのも忘れず。

「はからずとも、そんなふうに育てたわたしに責任があるだろう。だから娘の代わりにわたしが労ってあげようではないか」

「さあ背中を流してあげるから」と指示されて、ややためらいながらも背中をむけて、すこし上体を前に倒す。

息を飲み鼓動を早めて洗ってくれるのを待っていたら、思っていたの

とちがう滑らかな感触がして「っ！」と胸をそらす。

「お、お義父さ・・・！」と顔だけふりむけば、白い液体が滴る手のひらを見せてから「きみのきめ細かい肌を傷つけたくないから、ね？」と両手で背中をぬるぬる。

指先まで神経が通った繊細な手つきは相かわらず、極上のマッサージ受けているようで、でも、心拍数も体温もあがりばかりで「は、はあ、お、お義父さん・・・」と喘ぎを駄々もれに涎を垂らしまくり。

「まったく・・・これは娘が？」と引つかれた跡にボディークリームを塗りこまれて、傷口がひりつくのに「んん、あ、ああ・・・」と悩ましい声を。